巻頭特集　史跡を散策しながら地名の由来を探る

地名から読み解く中村区

普段何気なく目にしている地域の寺社はもちろんのこと、石碑や銅像などのモニュメント、建築物にはそれぞれ歴史があり、物語がある。なかでも地名は、その土地のかつての姿を私たちに教えてくれる道標にほかならない。今号では「中村まち歩きマイスターの会」代表の加藤隆夫さんの案内で、カッパ伝説が残る笈瀬川筋の史跡を巡りつつ、中村区の町名の由来を探ってみた。

名古屋の玄関口にはかってカッパがいた

今年三月、中村まち歩きマイスターの会と中村区役所まちづくり推進室による『中村区魅力マップ』が発行された。十二のまち歩きルートと、その周辺の見所を紹介した散策マップである。今回はその中から、名古屋の玄関「名古屋駅」の太閤通口をスタートし、笈瀬川筋をたどる散策ルートを歩いた。

まず訪れたのは、八雲琴が伝承されている水野社。八雲琴とは、十九世紀初めに伊予の中村琴主が出雲大社に参拝した折り、霊感によって工夫したとされる二弦琴で、神への献奉用として奏でられる。

次に駅西銀座を進み、椿神明社へ向かう。その名が表すように、昔は椿の森があり、その東側を笈瀬川が流れていた。笈瀬とは「御伊勢」のことで、椿神明社は伊勢神宮の外宮に、この後訪れる牧野神明社は内宮にそれぞれ見立てられた。現在、笈瀬川は埋め立てられてしまったが、川筋がそのまま道路となったため、道は緩やかに蛇行して走っている。

稲穂社、牧野神明社と回り、笈瀬通にある須佐之男社へ。社近くにはカッパのオブジェがあり、カッパ伝説の由来が紹介されている。笈瀬川にはカッパが棲んでいて、そのカッパは力持ちの男の子に変身できたそうで、ある日、川でおぼれた子どもを助けたことから「人助けのカッパ」と親しまれたとある。

笈瀬通を外れ、西に折れる。厳島神社、福田兼助碑を巡り、熊野社を経て金山神社に着く。鍛冶業の守護神、金山毘古神を祀る神社で、名古屋城築城の際は石工たちに信仰された。境内には残念石がある。名古屋城の石垣となるはずだったが、運ぶ途中で落としてしまった石で、落城に繋がるため縁起が悪いとされ、捨て置かれたもの。

散策ルートの終点は向野橋である。以前は京都の保津川に架かっていたそうだ。近鉄やJR関西線、あおなみ線など多数の線路を跨いでおり、生活道路として市民に利用されている。

椿神明社東側を南北に走る道路は笈瀬川を埋め立てて作られた。「椿神社前」交差点から南を向くと、蛇行して流れていた笈瀬川の面影が残っている

中村まち歩きマイスターの会代表の加藤隆夫さんと鵜飼佐宣子さん。同会は中村生涯学習センターの「なごや学マイスター講座」受講生有志で結成された観光ボランティア団体。中村区域内の神社や史跡を案内する活動のほか、それらを巡る散策コースを紹介した冊子も制作している。3月に発行した「中村区魅力マップ」は区役所などで入手できる。
■問い合わせ先:052-411-2234

◎稲葉地町（いなばじちょう）

この地域には稲干場や芝草地が多くあり、一面を稲や葉（草）が覆うようにあったことから名付けられたとされる。稲葉地公園内にある名古屋市演劇練習館は通称「アクアテンノ」と呼ばれており、昭和十二年に稲葉地排水塔として建てられ、昭和四十年から平成三年までは中村図書館として利用されていた。

◎岩塚町（いわつかちょう）

「きねこさ祭」で有名な七所社の境内にある塚（古墳）に由来する。岩のあるスカ（砂地・州の意）から、という説もある。

◎黄金通（おうごんとおり）

「こがね」と言う人が多いが、正式には「おうごん」と読む。昭和十年代、このあたりは稲がよく育ち、秋には稲穂の黄金色で埋め尽くされるほどだったという。そこから「黄金」と言われるようになった。「黄金の陸橋」として知られる黄金跨線橋は、名古屋市中村土木事務所によれば「黄金橋（こがねはし）」が正式名称であるそうだ。

◎水主町（かこまち）

地名としては消えてしまったが、今でも交差点名や郵便局名、店舗などの支店名に残っている。水主とは船乗りのこと。なかでも水軍など藩船の運航に従事していた者を御水主と呼び、その役宅がこの地域にあったことで名付けられた。昔は西側だけの片側町であったので、西水主町と称していた。

◎鳥森町（かすもりちょう）

江戸期には「糟森」「加須毛利」などとも記された。かつて鳥森城があった周辺には大樹の森が広がり、そこに多くのカラスが棲みついていたため鳥森となり、読みも「かすもり」と略された。

◎熊野町（くまのちょう）

熊野社（熊野権現）より名付けられた。権現通（ごんげんとおり）も同様である。熊野社境内にはクスとケヤキの保存樹が繁り、静かな佇まいを見せる。

◎寿町（ことぶきちょう）

中村遊郭内の町の一つ。中村遊郭は中区大須にあった旭遊郭を移したもので、寿町・大門町（だいもんちょう）・賑町（にぎわいちょう）・羽衣町（はごろもちょう）・日吉町（ひよしちょう）の五つの町があった。それらは「五町街」とも「五丁町」とも呼ばれ、現在もすべての町名が存在する。地域の人たちは大門を「おおもん」と呼ぶが、地名では「だいもん」が正しい。「おおもん」は遊郭の正面玄関を意味するので、「だいもん」としたようだ。日吉は、吉日または日々の商売繁盛の意が込められている。また、隣接する名楽町（めいらくちょう）は、中村遊郭が戦後、名楽園と呼ばれたことによる。

◎宿跡町（しゅくあとちょう）

鎌倉街道萱津宿の東宿（庄内川以東）に当たることが由来。東宿町（ひがししゅくちょう）も同じである。鎌倉時代、萱津宿は尾張南部で最も栄えた宿駅で、盛んに市が立ち、人々の往来で賑わっていた。

◎豊国通（とよくにとおり）

中村公園内の豊国神社にちなみ、名付けられた。また、鳥居通（とりいとおり）は、その豊国神社参道の入り口に立つ大鳥居に由来する。朱塗りの大鳥居は高さ二十四メートルもあり、国内最大級の高さを誇る。かつてはこの大鳥居の下を路面電車が走っていた。

◎則武町（のりたけちょう）

この地域を領有していた豪族、則武氏の名前からとされている。熱田神宮の古文書に「ナリタケ」という郷が記されており、これは則武のことで、神領もこの地にあったらしい。

■参考文献／『なごやの町名』名古屋市計画局・『中村区地名のおこり』中村区役所・『名古屋の地名』中日新聞本社・『中村区の歴史』愛知県郷土資料刊行会・『名古屋地名の由来を歩く』谷川彰英著（ベスト新書）

秀吉生誕の地にはゆかりの地名が揃う

笈瀬通にあるカッパのオブジェは全部で3体。笈瀬通商店街は「かっぱ商店街」の愛称でも知られており、以前は「名古屋市牧野公設市場」があったが、現在はスーパーになっている

中村区の中村は「中」という村の名前である。中村の地名の起こりは定かでないが、古くは平安中期に作られた辞書『和名類聚抄』に尾張国愛智郡の十郷の一つとして記されている。

明治二十二年、名古屋に市制が施行される。当時、中村地方は市域外で、笈瀬村、鷹場村、日比津村、織豊村、岩塚村などがあった。その後、村々が合併して愛知町、中村、常磐村が生まれる。これらの地域が大正十年、名古屋市に編入され、中村区創設の基となった。そして昭和十二年、四区制から十区制となり、西区と中区からそれぞれ一部地域を分離して中村区が誕生した。

中村と言えば、豊臣秀吉が生まれた場所としても知られている。ゆかりの寺社など史跡が点在し、秀吉にちなんだ地名も多い。太閤通のほか、千成通、日ノ宮町、本陣通などがあげられる。

太閤通は太閤秀吉からで、千成通は秀吉が馬印として使った千成瓢箪にちなむ。日ノ宮町は、秀吉の生母が男子を授かるよう祈願したという伝説がある日之宮神社にちなみ、名付けられた。本陣通は秀吉が小田原征伐からの帰路、この地に本陣を置いたことからで、織田信長が萱津合戦の際に置いた本陣跡からという説もある。

そのほか、地名ではないが橋の名前、豊公橋も秀吉から来ている。また、明治期にあった織豊村は、織田と豊臣の一字ずつをとって村名にしたという。散策で訪れた金山神社には秀吉の像があった。神社と秀吉はとくに結び付きがないそうだが、それだけ地域出身の英傑を誇り、親しんでいる表れと思われる。

金山神社境内にある豊臣秀吉像